

## 第 2 回浜松学のあり方検討委員会 議事録

- 1 日時 2025 年 3 月 21 日（金）午後 3 時 00 分から
- 2 場所 浜松市役所本館 5 階 庁議室
- 3 出席者 委員 5 名  
（下鶴志美委員、井熊正浩委員、小田切徳美委員、高木邦子委員及び山名副市長（委員長））  
事務局 3 名  
（企画調整部長、企画課長、企画課長補佐）
- 4 報道関係者 なし
- 5 概 要 以下のとおり

### 1 開会

（事務局による司会進行）

### 2 挨拶

（山名副市長）

皆さんこんにちは。年度末のお忙しい中を、お集まりをいただきまして、ありがとうございます。

昨年の 12 月 25 日に第 1 回目の開催をさせていただきました。地域の愛着を育むことにつながる事例や若者の地域への愛着の状況などをご紹介させていただいたところ、皆さまからは専門的な観点から、地域の魅力や地域への関心を高めることなどにつきまして、大変参考になるご意見を多くいただき、ありがとうございました。

本日は第 2 回目ということで、皆さまから 1 回目にいただいたご意見を踏まえまして、目標、目的、手段などの大枠をまとめた浜松学のあり方の骨子（案）をお示しさせていただきます。そして、浜松への思いを育む手段として地域とのつながりに注目をし、他の自治体、そして市内の事例を事務局からご説明やご紹介をさせていただきます。

骨子（案）や、地域とのつながりをつくって保ち続けるための課題、そして必要な要素、経験に基づく取り組みの事例など、皆さまから本日も様々なご意見を賜ればと思っております。今回の議論を基に、来年度は浜松学のあり方の取りまとめを行っていくこととなります。ぜひ本日も委員の皆さまには、各分野におけます専門的な知見から、活発なご意見をいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

### 3 議事

- (1) 浜松学のあり方の骨子（案）について  
（事務局から資料1に基づき説明）

#### <意見交換>

（委員長（山名副市長）による司会進行）

（下鶴委員）

第1回の会合の折に、井熊委員から「のびゆく浜松」が話題に出ました。私もぜひ、もう一度見てみたいなと思って探してまいりました。教育センターにありましたので、もう一度紐解いてみました。浜松の持つ魅力再発見というような感じがしました。。高木委員もお探しになってくれたということですが、

まさに浜松の自然だとか、産業、歴史、それから人々の暮らし、そういったものを本当に発達段階に合わせて、しっかりとまとまっているなということを感じました。その中でも巻頭言に、教育長さんがこのように書いています。「この『のびゆく浜松』には、郷土を支え盛り上げ、未来の浜松市をつくっていかうとする人々の様子が描かれています。本冊子を活用することで、時代の変化とともに、市がどのように発展を遂げていくのかを学び、先人たちの努力や工夫に支えられて、現在の浜松市があるということに気付くことができると思います。未来の浜松市を創っていくのは皆さんです。今後も皆さんが、学校や社会で多くの人とともに学ぶことを通して、さらに視野を広げ、急速な時代の変化に対応できる市民として、成長して行くことを期待しています」。この浜松学を後押ししてくれるような、力強い巻頭言だと思いました。最初にこれを紹介させていただきたいと思います。

さて、まず確認なのですが、この浜松学のあり方の最終目標は、「住み続けたい、戻ってきたいと思う」ということですので、人口流出の減少を目指すということにターゲットをということによろしいですね。浜松に住んでみたいとか、行ってみたい、今後、関わってみたいというよりも、現在いる浜松の人たちに魅力をいっぱい教えて、また浜松が選ばれるような、そこにターゲットを置くということによろしいでしょうか。

（事務局）

委員がおっしゃったとおり、メインのターゲットは、やはりまず浜松に住んでいらっしゃる方が、そのまま住み続けたい、いったん外に出たとしても、戻ってきたいと思うまちを目指すというのが、一番大きなターゲットになっております。

市外に住んでいる方が浜松に来たい、浜松に関わりたいという気持ちは、もちろんプラスアルファの要素としてはあるのかなと思っておりますので、除外するものではござ

いませんけれども、主なターゲットとしては、住んでいる方にそのまま住み続けていただく、出ても戻って来ていただくというところを中心に考えております。

(下鶴委員)

いかに地域愛をどれだけ育めるかということだと思います。手段ですけれども、手段の①に、地域の魅力を知り、体感し、気づくことで地域への関心を高めるということが入っておりました。

実は先日、新聞に市長さんの高校での講演の様子が書かれておりました。その中で、人口減少の中で、高校生が講演後、市長さんに「浜松の何が足りないんですか」というような質問をしたと。そうしたら市長さんが、魅力が足りないのではなく、気がついていないのではないかとということをおっしゃったということが、記事に書かれていました。

まさにこの気づきというのが、本当に大切なのかなと思いました。浜松の魅力を気づく、そして好きになる、そしてつながっていく、つながりを保ちながら、今度はその浜松の魅力を発信できるような、そんな人材をつくっていくというようになったら、これはとても素晴らしい浜松の、浜松学のあり方なのかなと思っています。最後は、アンバサダー、伝道師のような人材がいると浜松の魅力がどんどん広がって行くのかなと思った次第です。

浜松学のあり方の骨子(案)の最後の4番目の対象ですけれども、0歳から60歳までのグラフがあり、つながりをつくるのが20歳のここにターゲットを置くということなのですけれども、まさに高校生・大学生であり、小中については「のびゆく浜松」とか有効に活用していただいて、総合的な学習やキャリア教育で、一生懸命地域にちなんだ学習をしていきます。そしてやはり高校生が外へ出るとか、そういうときに、やっぱり浜松はすごいんだということを、高校と地域とが一緒になって学びをつくる。そういう工夫がこれからは必要なかなと思っています。

部活動でも、教育課程の一部でも良いですけれども、地域と一緒に学びをつかっていく、そうした中で学んだ高校生は、きっと浜松を大事にするでしょうし、何かの節目節目に浜松を恋しく思ってくれるのではないかなと思います。いかにその高校生・大学生にアプローチしていくかというのが、これを見たときに、今後の1つのキーポイントかなと思った次第です。

(井熊委員)

この骨子については、事前にお送りいただいたものを拝見して、よろしいのではないかな、問題ないかなと思いますが、気がついたことお伝えしておきます。

まず、最終目標はこれでよろしいかと思えます。目的についても、こうあるべきだなというふうに思っておりますが、やはり、今後、話し合われる手段、方法論のところ

非常に重要になってくるだろうということなので、ここについて、私どもでしっかり意見や話し合いができれば良いかなと思います。

自分の経験の話になってしまいますけれども、私は東京の大学に行っていて、夏休みに帰省した際に、大学の友達が浜松に行ったことがないから、夏に泊めろということで3日から4日、3人ぐらいで遊びに来まして、どこへ連れて行こうかなと思ったのですが、免許を取ったばかりだったので、家の車に乗せて、阿多古川に連れて行きまして、バーベキューをして帰って来ました。

そうしたら連れて行った人間がいたく感激しまして、もともと東京の人間で、あまりああいうところへ行ったことがない人間だったものですから、浜松は良いところだなあと。車でちょっと走るだけで泳げる川があって、あんな楽しく遊ぶところがあるなんて良いとこだねと言われたときに、ああ、そうなんだと。こういうのはすごく良いんだなということ、私自身も認識をしました。

そんな経験もあって、先ほどの下鶴委員の話につながるかもしれませんが、やはり、気がついていない可能性が非常に高いですね。それを教えるというか、そういうものだよということを伝えるガイドというか、アンバサダーが必要だろうということもわかりますし。そんなことを折り込みながら、今後の具体案として考えていけると良いのではないかなと思いました。

それから、浜松学のあり方の骨子については、この対象は特に方法論を具体化するときに、このターゲットは必要だと思いますけど、あまりこれにこだわりすぎると、いろいろ良い案も出てくると思うので、決めつけない方が良いかなと思っています。ここを中心に幅広い世代で、浜松のことを認識していただく活動という捉えの方が良いかなというふうには、個人的には考えました。

(小田切委員)

ご説明いただいた資料1の骨子については、大きな異論はございません。その上で、少し細かいことも含めて2つ申し上げてみたいと思います。

ひとつ私非常に良いなと思ったのが、最後の④のシートでしょうか。関心を高める、つながりをつくる、つながりを保つ。ここまで書き込んでいただいているということが、従来にない前進面かなと思っています。そうだとすると、ひょっとしたらもう一歩踏み込んでも良いのかなと思っています。

最終目標は2つめのシートですが、住み続けたい、戻ってきたいという、ここに加えて、戻ってくることを念頭に置いて、関わり続けるということも、1つの目標の中に入れても良いのではないかなと思います。

もちろん最終的には、戻ってきていただくことが望ましいということは間違いないわけなのですが、たぶんその中間領域もそれなりにハードルがあって、さまざまなライフイベントの中で、関わり続けること自体が大変です。結婚して出産、場合によっては病

気をする、そういう状況の中で、浜松と関わりを持ち続けるという、そのこと自体大変価値あることだだと思いますので、ここの部分、繰り返しになりますが、戻ってきたいと思うに加えて、戻ってくることを念頭に置いて、関わり続けたいと思う。あるいは、この戻ってきたいという中には、関わり続けるということも入っているんだという、そんな注釈があっても良いのかなと思いました。

それに関わって細かいことなのですが、3 ページ目になりますが、③地域とのつながりを成長後も保ち続ける。これはたぶん下の、こどもたち、こどもの成長などを念頭に置いてこうあるわけなのですが、「転出後」という言葉を入れることによって、例えば、浜松に仕事で関わっている、ある人は転勤で関わっているし、ある人はそこで起業するということもあると思いますが、事情によってさらに転勤になるとか、転出する、しかしながら関わりを、つながりを保ち続ける。そんなふうにも考えることもできますので、成長という言葉も、さらに広げても良いかなと思ったりしております。

このようにむしろターゲティングをしている中で、少し拡張的な話をするのが、各委員もご存じのふるさと住民票の議論があって、1月に石破総理が、ふるさと住民票、ふるさと住民登録の検討を行うということも、施政方針演説でされました。実はこれ、われわれの長年の施策要求、政策提言でもございます。

わかりやすくいえば、2枚目の住民票を持って、一番望ましいのは、2枚目の場所に分割納税をするという。私的なことですが、私は今、関東に住んでおりますが、娘や孫がお世話になっている浜松市に、住民税の何パーセントかを収めたいとか、あるいはこの前申し上げましたように、妻がしょっちゅう来ているもので、事実上、2地域居住状態で、それにも関わらず住民税を納めてないのはおかしいだろうと。そんなことがあって、分割納税をしたいという気持ちは、率直に言って存在するわけなのです。

これがふるさと住民票の真の目標だとしても、現実にはそこまでいかないにしても、ふるさと住民登録というのは、総理大臣がああいうふうに言ったからには、何らかのかたちで進むんだらうと思います。そういう意味で、そこに住むだけではない住民の形態というものが、政府でも議論されている中で、浜松市においても、つながり続けるということも、かなり意識しても良いのではないかなと思っております。これが1点目です。

それから2点目。これはまさに前回申し上げたのですが、事例からお話ししますと、長野県の安曇野市に、安曇野ふるさとづくり応援団というところがあって、そこが今年の3月、つい最近ですが、「ふるさと探究ハンドブック」というものを作りました。ひと言でいえば探究学習のハンドブックですが、これをNPOが作っており、しかもどういう問題意識かという、探究学習の担い手こそが問題なんだということです。

探究学習の中身については、いろんな議論や実践があって重要なんだけど、むしろその担い手をどう育てるのが重要で、その担い手論というのが、まさに探究学習のポイントになるんだという、そんな問題意識から作られたハンドブックです。

前回申し上げたように、この浜松学のあり方については、もちろんあり方をどうあるべきかということで、What として議論すると同時に How の部分、この浜松学というものができたときに、それをどう実践するのかという How の部分がないと、絵に描いた餅になってしまうというか、あるいはこの報告書なり文書なりを作っただけで終わってしまうと思うんですね。

そういう意味で、現実にこの浜松学を実践できるような担い手がどういうものなのか、あるいはそれをどういうふうに育てるのかということと、この議論というのは、セットであるべきだというふうに思っております。先ほど言った表現で言えば、What という議論と How という議論は常にセットで考えないと、この種の議論は絵に描いた餅になるという、そんな意識を持っているということもありますし、先ほど申し上げましたように、安曇野市ではわざわざハンドブックを作っている、そんな NPO まで出てきているということを見ると、ぜひ最終的にはそこまで踏み込んだような、もちろん具体的なことは予算措置を伴うので、なかなか議論しづらいと思いますが、そういった担い手論についても、今後検討する必要があるぐらいのことは、書き込んでいただきたいなと思いました。

(高木委員)

私も感想からなのですからけれども、前回のときに、特に私はとりとめもなく感想を申し上げたわけなのですからけれども、そこから、こういうところに注目して浜松学が展開するのかというのを、非常にクリアに見える骨子でした。ありがとうございます。

もう1つ、先ほども井熊委員や下鶴委員がおっしゃった「浜松のよさに気づかない」という話があって、あっと思い出したのが、今はいなくなってしまったのですけれども、うちの大学に観光学の専門家の先生がいらっしゃったんです。その方が同じことをおっしゃっていて、「浜松以外のところは、うちは何もないと言っているところでも、ものすごいポテンシャルがあって、そこを高めることで観光客が来るようになるんだけど、浜松はそもそもポテンシャルがすごくあるのが見えているのに、もうちょっとアピールができるのではないか」ということをすごくおっしゃっていました。

彼が目目していたのはパワーフードとかギョーザなどの食事だったのですけれども、もちろん音楽のことですとか、浜名湖のことですとか、すごくアピールするポイントがあるので、そこをもうちょっとうまくやれば良いということ思い出しました。浜松の人にとっては、当たり前にある浜名湖ですから。けれども外の人から見ると、セカンドハウス建てたいと思うような場所らしいです。まず1点目の感想です。

今日のお話はつながりをつくるところの資料が出ているので、そちらに流れると思います。私は教育の人間なので、手段の一番目のところに関心があります。先ほど下鶴委員がおっしゃった「のびゆく浜松」について私も知っている先生に見せてくださいとい

って、小学校と中学校で読ませていただきました。読み物としてはものすごく面白くて、これ良いなと思ったのですが、いくつか問題があるなと感じました。

現場の学校の先生方に伺いますと、今は指導要領をこなすのに手一杯で、「のびゆく浜松」まで触れていられないという声がありました。また、現在は電子教科書になっているのでオンラインのファイルなんですね。そうしますと、これは卒業した後に、今下鶴委員がお持ちのように、紙をぺらぺらめくって見直すということはないのではないかなというのが2点目です。

3点目は、教育に使うためのということで作られているので、それ欲しいとおっしゃる保護者とかいらっしゃるようなのですけれど、販売をしていないそうです。すごく良いのに教育現場以外では目に触れられないのがすごく残念だなというふうに感じました。ですので、これはもしかしたら小中学校だけではなくて、もっと広い人たちが手に取れるとか、情報に触れるということが、ひとつ地域の魅力を知ることになるのではないかなということで、ご提案として申し上げました。

関連しまして、市民協働の活動とか、学校が絡んで地域のこととか、たくさんやっているのを私も見聞きするのですけれども、わりと単発でやっているんですね。この高校がこれをやっています、この中学校がこれをやっていますなど限定的なものなので、それを浜松市全域で浜松市にある高校を貫いて何かやるとか、市全体でやっている雰囲気を出した方が、たくさんの人の目に触れるのではないかなということを感じておりますので、これが2点目のご提案です。

(下鶴委員)

先ほど高木委員からもお話ありました「のびゆく浜松」について私も現場を離れてしばらくたって、そういうふうに活用する機会が減ってしまっているのかなと思って、寂しく思いました。

そこで事務局に確認をしたいと思うのですけれども、浜松のこどもたちはパソコンを1人1台持っていて、その中にデータとして入れてあるということも聞きましたが、入っていますよね？

(事務局)

データとしてパソコンの中に入っています。

(下鶴委員)

クリックして、手元でいつも見ることができるということにはなっているんですね。その時間をどう取るかというのは、なかなか難しいところではあるかもしれませんが、本当に素晴らしいので、なんとか活用をしていただければなと思っています。

(井熊委員)

授業としては使ってないんですか。

(下鶴委員)

使う先生もいらっしゃると思います。

(山名副市長)

われわれのときはそういう時間がありましたよね。

(下鶴委員)

社会科の先生たちが集まって編集しているので、時間をかけてやってらっしゃると思います。

(山名副市長)

これはアップデートというか、どれぐらいの頻度でやってるのでしょうか。

(事務局)

3年に1度程度、改定されると聞いています。

(2) 地域とのつながりをつくり、成長後も保ち続ける取組について

①他自治体の事例

(事務局から資料2に基づき説明)

②浜松市の事例

(事務局から資料3に基づき説明)

<意見交換>

(高木委員)

私は浜松市に住んで、もうだいぶ経つのですが、こんなにいろんなことがたくさん行われているのを、恥ずかしながら存じ上げませんでした。

アンテナを張っていないという私のせいでもあるのですが、こういったつながりに関する施策をしても、上手に届かないことがあったらとても残念だなということが、こんなにやっているなら、もう新しいことを始めなくて良いのでこれをベースに何かできたら良いですが、そのアピールが難しいなということをひとつ感じました。

水窪ですとか、限界集落、中山間地域の方が盛んに始められているので、もしかしたらノウハウはそこにあるのかしらという印象を受けました。すみません。今はこの2点だけ申し上げました。

(小田切委員)

私も2つ申し上げたいですけど、その前に地理総合について調べていただいて本当にありがとうございます。ポイントは、人によっては暗記科目で大嫌いな地理が必修化されたということで、しかも従来の地理ではなくて、むしろ探究学習とセットになるような現場に出る地理になって、もう地理というのは地域学という、地域という科目に名称を変えても良かったのではないかという、そんなふうな変化があります。必修ということは、すべての高校生がそれを学んで卒業する時代になったという、ここは大変大きいなと思っております。

先ほど2つ申し上げたいと言ったのは、1つ目は高木委員がおっしゃったように、浜松市内、あるいは他自治体の事例、非常によく調べていただいて大変勉強になりました。調査力が相変わらずすごいなというふうな、それが第一印象です。

この表題の「地域とのつながり」というのは、おそらくより正確に表現すると、地域の価値とのつながりである。べたっとした地域とつながるのではなく、地域にある価値とつながるという、そんなことなんだろうと思います。

そういう意味では、先ほど下鶴委員がおっしゃったような、その価値に気がつかない、その価値に対する気づきというのが重要であると同時に、価値という言葉を使った瞬間、それを磨くのが重要になるというふうに、そんな議論が出てくるのだと思います。

もちろん古いままで意味がある、価値があるということもあるわけなのですが、それを限定的に解釈することによって価値が出てくる。これはまさに典型的な「磨く」ということですし、あるいは使いつくされてしまえばなくなってしまいうのを保全するという、これも「磨く」になると思っていますね。そういう意味では、この地域の価値を磨くという視点を入れていただくと、よりわかりやすいものになるのかなと思いました。

それから2つ目は、今高木委員が天竜区を中心とした事例が出ているということをおっしゃって、私もそのとおりだなと思ったのですが。他の自治体も含めて、これも前回申し上げたことですが、政令市浜松よりもはるかに小規模な自治体が対象になっているということ、どう考えるのかということだと思います。

少しだけ事例を紹介させていただきますと、他自治体の事例の中の「ヒダスケ！」という、岐阜県飛騨市は、われわれの研究分野では一番注目されている、いわゆる関係人口づくりの、最近ではいろんな方が視察に行くところです。私も先週、この「ヒダスケ！」のプログラムに参加するというかたちで調査もしてきたので、少しだけご紹介させていただきますと、ひと言でいえばボランティアをホームページで募集するということなのですが、そんな単純なものではなく、冒頭に書いてあるように、飛騨の人がちょっとや

ってみたいことや困りごと、例えば、ある集落の棚田の石積みが崩れたので、これを修復するという困りごととか、あるいは私が参加してきたのは、古民家を改修してゲストハウスにするので、その壁のしっくい塗りを募集するというサイトなんですね。

そういう意味では困りごとなのですが、それに対して市内外の方々が楽しく参加する。その楽しく参加するというのは、そこに参加することによって新しいネットワークをつくる。私が参加したその壁塗りには、結婚して来て、まだ友達がいなかったので来たという若い女性の方が参加されていました。同様に、移住者で地域内でネットワークがないのでという、そういう方々も参加していて、言ってみれば新しいネットワークをつくる場になっている。これが「ヒダスケ！」でした。

何が言いたいのかというと、それを市が非常にうまく運営して、一つひとつのプログラムに市の職員が必ず参加するような形で、いろいろマネジメントをしています。飛騨市の人口は2万1,000人であり、おそらくそういう自治体だからこそできるものだと思うと、いろんな形があるにしても、広げるときに、浜松市の全域で取り組むのか、あるいは小学校区単位とか中学校区単位で取り組むのかとか、その辺りの議論がおそらく出てくるのだらうと思います。

先ほど How も同時に議論するべきではないかと言ったのはまさにここで、こういいたいわけの関係人口づくりとか、地域の価値とのつながりづくりが重要だといった場合には、それをどういう単位で、どういう担い手で実現するのかということが、やはりテーマとならざるを得ないんだと、そんなふうに考えております。

(井熊委員)

今までお二方がお話しいただいたことに、すごく賛同したいなと思いますが、自分は理解がもうひとつ前に進んでいなくて、今ご紹介いただいたものは手段の1つとしてこういうものがあるのではないかという、例としてのご提示ですか。

(事務局)

説明が足らなかった部分がありますが、先ほどの資料1の中の③のページのところで、手段が記載してありまして、その手段の中で①に関しては、前回第1回の検討委員会の中でご説明したものが多く含まれているのかなと思っております。

浜松学を進めて行く手段として3つある中で、②と③については前回の中にあまり含まれていなかったということで、今回改めて少し調べたものを経過としてご報告した次第でございます。

(井熊委員)

②、③のこういうものがあるのではないかという、そういう意味でのご提示ですか。

高木委員もおっしゃっていますけれど、私もこんなにたくさん浜松市がやっていることを知らなかったですし、他の地域でもいろんなことをやられているんだなと思いましたが、なんかちょっとぼんやりというか、こうすれば、そうだ確かに良いねというところまで、自分の気持ちがならないというか。

例えば勝坂の神楽なんかは、私もこれだけは知っていたんですけど、勝坂へ行ったことある人は、たぶん浜松の人ほとんどいないと思うんですね。勝坂の神楽の継承活動に人が増えたら、最終的な目的の浜松に住み続けたい、戻ってきたいと思うかどうかというのは、また別の問題だろうと思うわけです。

いろんな活動があるんだけど、ここに参加する人たちをどうやって増やすかということが重要であって、この浜松のよさを、先ほどからずっとお話が出ていますが、小田切委員が言った担い手をどうつくるかというところが重要だと思います。具体的な手段の中には、担い手をどうやって育成するかというところが出てくると良いかなと、個人的には強く思いました。

なかなか簡単ではないと思いますけれども、高校生、大学生、社会人、若い方も、例えば浜松に移住する希望者が来たら、都会の方を自分が案内しても良いよといった、当然その人にはインセンティブ必要でしょうけれども、そういった育成を具体的にできる手段を考えられても良いのかなと。

そういう人たちも、こういう素晴らしいことをやっているなら僕も参加しよう、私も参加しようとなっていくような気がして、総合的に、集まりは小さくても数が集まれば大きな力になっていくような気がいたしました。

(下鶴委員)

私も3人の委員と一緒に、本当にこのお調べしていただいた貴重な資料、大変だったなと思います。全国的な他自治体の事例だとか、浜松市もこんなに地域とつながりに関する事例があるなんて全く私も存じ上げずに、改めてこれがそうだったのかということを感じた次第です。

実は私、春野町の出身なんですね。北遠の中ですけれども、小田切委員がおっしゃいました、にぎやかな過疎というのでしょうか、人口減少だけでも人材増というような、そんな春野の里を目指しているのではないかなということをときたま感じます。

ただ、ぱっと見たとき、網羅的に見たときに、単発すぎて、これをひとまとめにやっていたら、もっと注目を浴びるというようなことを感じて、例えば水窪も佐久間もそれぞれではなくて、北遠地域で何かほっこりした縁みたいなものをつくって、温かな地域性というような、そんなことで同じようなことをやってみたりとか。綱引きのみんなが力を合わせて、よいしょ、よいしょとやってるよりも、みんなでわっとならした方が良いのかなと思ったりもしています。

先ほど井熊委員の話にございましたけど、高校生とか大学生をどうターゲットにするかというのは、私もそれはすごく今回のことで勉強をさせていただき、高校生はいったいどんなことをするか調べてみたんですね。浜松市内の高校で、私学なんですけれども、地域創造コースをつくって活動している学校があって、地域の活性化に挑む学校ということで、「魅力の見える化」と「人をつなぐ化」をキャッチフレーズにやっています。こういう高校生がどんどん増えていけば、また地域とつながっていく、地域を大切にしていこうというような、ひとつの企画になるかなと思った次第です。

地域とつながることで、もう一度私自身も浜松の事例を紐解いて、どんなことをされてるのかなということ、自分自身勉強してみたい、興味深いなと思った次第です。感想で、申し訳ありません。

(井熊委員)

2つ段階があるかなと思って、実は今までの議論の中では「のびゆく浜松」のように、1つの段階として、教育というところの重要さというところが共通になったかなと思うのですが、もう1つやはり、具体的な手段としてどういうものが一番有効なのか、この2つの議論をやっていく必要があるのかなというのを個人的には思っています。

個人的な経験で恐縮ですけど、私、山口の何人かと話をしたことがあって、松陰先生の話が出てきます。良い悪いは別ですけど、彼らの受けてきた教育の中に、吉田松陰という人間がいかに大きく育てているかということに、非常にびっくりした記憶がありまして、教育は非常に重要だと。どのように擦り込むかという問題もありますけども、今の「のびゆく浜松」はカリキュラムから外れているとすると、それは大変寂しいこと。それをもう一度再考していただく必要があるのではないかと個人的には思っていました。

一方で、先ほどの繰り返しになりますけれども、担い手を含めて人材育成、具現化して、どういう活動に落とし込んでいくか、その議論を進めていった方がと思いました。

(小田切委員)

今の井熊委員の話聞いて私も思ったのですが、「のびゆく浜松」は本当によくできている副教材だなと思いました。1つ確認させていただきたいのですが、これはかつては小学校4年、5年で地域のことを学ぶ時間、社会科で、そこで使ったのでしょうか。それとも当時は総合的な学習の時間はなかったもので、今は逆にその時間で使いやすくなっているという、使い方はどうなんですか。

むしろ総合的な学習の時間にぴったり当てはまるようなものですが、最近では「のびゆく浜松」が使われなくなった理由は何なのでしょう。実感的なことで構いません。

(事務局)

断定的なことは、確認をしないと申し上げられないところではありますけれども、おそらく使われていることは使われているのだと思います。副教材というような位置づけだということですので、今の総合的な学習の時間の中で、使われているという認識だと思っております。

(小田切委員)

総合的な学習、総合的な探求の時間に、地域づくりの観点から見て思うのは、失礼な言い方だったらお許しください、それぞれの学校の校長先生の方針によって、それがごろっと変わってしまうということを感じております。つまり、カリキュラムの中に、4年生の社会の中に位置づいていれば、どこでも等しく教えるのですが、それが逆に総合的な学習、総合的な探求の方に入ってしまうと、特に校長先生の方針によって変わることです。

他の部分で特色を出すということもあって、使ったり使わなかったりすることが、ひょっとしたらあるのかなと思ったりして、この辺りは、調べていただく必要があるのかどうかわかりませんが、ひょっとしたら井熊委員おっしゃるように、ヒントになるかなというふうに思っております。

(山名副市長)

ありがとうございます。総合的な学習にその地域の地域づくりは、当然入っていると思います。確認したわけではないですけども、教材としてのびゆく浜松が使われているところもあると思います。

(下鶴委員)

わりと多いですね。3年生が地域のことを学んで、4年生が福祉のことを学んでいく。5年生が環境問題、6年生が自分になりたい生き方というような、テーマ性を持って1年間で学習していくことが、この前も調べていただいた中の後ろに載っていると思います。

おそらく地域を学ぶときに、どの程度を地域と考えるかということもありますけれども、ただ、これをすべてくまなく学習するということは、大変難しいかと思えます。いろんな自分の地域に関わること、例えば三ヶ日なら三ヶ日のことが載ってるよとか、そういう形で調べる、使っているというふうには思っています。

今は冊子ではなくて、自分自身で好きなときに学習できるということもあるものだからね。

(山名副市長)

おそらく自分たちがこどもの頃は、最初から、初めのページから順を追って、すべてをやっていたと思います。

(井熊委員)

テストもやったような気がします。

(山名副市長)

今はいろんなことをやらなければいけないので、その中でピックアップしたものだけで使われているという、そういう形でしょうか。

(下鶴委員)

そうだと思います。でも、わりと好きな子どもたちがいますので、休み時間だとか「のびゆく浜松」を見ている子どもたちもいたりしましたね。

(山名副市長)

そうですね。自分たちに近いような内容があれば地域学に合いますね。

(下鶴委員)

そこは本当に子どもたちが学びやすい、なんと言っても、身近な先生たちがつくっているのではということがありますね。

(小田切委員)

ついでにお尋ねすると、この度決めていただいた教育推進大綱の中での議論に、例えば、「のびゆく浜松」や総合的な学習の時間についての編成方針などに何らかの議論があったのでしょうか。

(事務局)

教育推進大綱を決めていく中では、やはり地域のこと、浜松を知ってもらって、元気な浜松の実現に向けてという観点でのご議論はいただいております。

具体的に「のびゆく浜松」がというようなところまでは、やはり市長が定めるものになりますので、教育の内容にまで市長が、あまり口出しをするということは適切ではないということもございますので、そこまで具体的なことは書いてはございませんけれども、やはり地域を知ってもらって、地域を好きになってもらうことは、必要だということとは記載があったと思います。

(下鶴委員)

浜松の魅力を最大限に子どもたちに教えていこうという姿勢は、市長さんもすごく大切にされていました。浜松愛というのがずっと出てまして、それはうれしく思いました。

(山名副市長)

地域の魅力を認識してほしいが、できていないところに少し弱さがあるのですけれども、「のびゆく浜松」もこれだけ素晴らしい資料があるのに、そこにみんな気づいていないというか、そういうこともあるかもしれません。

(下鶴委員)

もっと身近に、これを浜松でつくっていたんだという例として、パラリンピックの車椅子について、あれは子どもたちびっくりしたと思うんですね。それをつくっていたのは浜松なんだっていう、そういうことが浜松の自慢につながっていくようなことがあると思います。それがまた「のびゆく浜松」などに掲載されると、またすごいことになるかなと思います。

(高木委員)

前回の会議のときに、若者たちに浜松は好きかとか、住みたいかといったことを聞いたアンケートがあったと思うのですけれども、効果測定と言いますか、何をやったら好きになったのかといったところが聞きたいなというのを、素朴に思います。

例えば、地域のつながりに関する施策はたくさん、まあいつから行われているかわからないのがありますが、こういうものはワークしているのか、ちゃんと地元愛に根差しているのかなど。浜松で働こうと思った人たちがいたら、その人たちはなぜ働こうと思うに至ったのか、そういったことがヒントになるのではないかと思います。何かしらそういう情報はないでしょうか。

(事務局)

そのところはわれわれも、浜松から一回転出された方が戻って来たという理由を一番聞きたいと思っております、いろんな場面で聞いてはいるのですけれども、表面的なところしかなかなかお答えいただけない部分があるのかなと思っております、就職先がそこしかなかからといった理由が、返ってくることが多いのが現状になります。

(高木委員)

実際に外から帰ってきた人たちは、何で帰って来ようと思ったのかなという。今住んでいる人たちは結構好きだけど就職は外ですといったイメージだったかと思うので

すけれど、帰ってくるに至るポイントがあるなら、そこをすごくアピールすれば良いなと素朴に思っていました。そんな簡単な事ではないのかもしれないですけど。

(井熊委員)

それは理屈ですよ。結構多いのがリターンよりもIターン・Jターンの方で、奥さんが浜松の方で、奥さんが浜松へ帰りたいたいと言うからしょうがないから帰ってきた。そういう方はすごくたくさんお目にかかったことがあります。

(高木委員)

奥さんはなぜ浜松に帰りたいたいと思ったんでしょうね。

(井熊委員)

子どもができて実家の近くで暮らすと楽だからと聞いたことがあります。

(高木委員)

そういうことだと理由は、浜松の魅力ではないですね。

(井熊委員)

そうやって考えると、浜松の女性って強いですね。

(事務局)

今おっしゃったような理由もありますが、そうは言っても、好きだとか、浜松のことを魅力があるということが、帰ってくる1つのプラスアルファの要素になるのかなというような考え方から、こういった骨子を作らせていただいた次第です。

統計的になかなか出しにくいところがございます、一部の方の意見というものは、もちろんあるのですけれども、統計でまとめた形が、今出せていない状況でございます。

(井熊委員)

幸福度の調査で浜松が上位に入りますよね。あれは1つのヒントかなと思います。どこに幸せを感じているのかというところを強化すればよいのではないのでしょうか。

(山名副市長)

それは何か項目ごとで拾えるのでしょうか。

(事務局)

項目ごとには出ています。自治会のつながりですとか、そういったものが非常に強いと、そのつながりが非常に強いという分析が出ています。

(井熊委員)

なかなかそう簡単に出るものではないですよ。

(下鶴委員)

前回資料のアンケートの中で、なるほど、これだなということを感じたんですね。浜松が好きなのところの意見で、都市としてのバランス、浜松の雰囲気が良い、田舎でもないし、大都会でもないという、そこが良いということ。生活の快適さ、交通の利便性とか、豊かな自然環境に囲まれている、食の豊かさ、コミュニティと人間関係に加え、誇れる文化や産業があるとかということが、若者たちが浜松が好きだと言っているという内容です。これは若者だけでなく、いろんな人が見たときも納得できる場所ではないかというふうに捉えました。私は、これは貴重なアンケートだったと思っています。

(高木委員)

高校生が地域とつながるといのは、高校生の自主性に任せていると簡単にはいかないのではないかと感じる場所があります。私は市民協働センターの「はまこら」にご縁があるのですが、そこでもかなりボランティア養成講座といった、市民協働の人材を養成しようといったこととかもされているのですが、参加者がすごく少ないです。1桁や10人ぐらいいるときもあるみたいです。やる気がある人だけ寄っておいでとやると、そうになってしまうだろうなという印象がすごくあります。

で、ここから先はすごい危険な話をするんですけど。例えば高校全体でやってくださいとか、いくつかの高校でユニオンでやってくださいとか、この中学生の授業の一環という言い過ぎですけど、中学校の子たちみんなでこれをやろうよみたいなことは、最近の学校現場ではなかなかできないのですが、そういう無理やりにも最初手を付けさせられて、やってみたら面白いということを経験させたいなと、個人的には思います。

ですので、いっぱい募集はしていますという待ちの姿勢ではなくて、アウトリーチというか、取りに行く工夫、育てていくという、やっpegらんよって引っ張り込むような姿勢もいるのかなと感じています。無理にやらせるという話なので、ちょっと過激ですよ。

(山名副市長)

それはやはり市役所の仕事でも、いろんなところありますけれども、高校生の参加ということが視点としてございますので、どこまでやらせるという、やらせ感が強いと、今のこどもたちは逆に反発もしてしまうので難しいところではありますけれども、必要なことではあるかなというふうには思います。

(小田切委員)

今の高木委員の高校生の話ですが、私の研究分野の1つに、この前も申し上げた高校魅力化があります。これが地域づくりとどういうふうにつながっているのかということがあって、その中で、高校魅力化というと島根県の隠岐で始まったように、どうしても島留学というそこばかりが注目されるのですが、そうではなくて、むしろ高校生が地域の中に飛び出して行くということです。それではその島留学とどういうふうに関連するのかと申し上げると、むしろ外から来た学生が積極的に地域の中に入って行く、つまりそういった経験がないからこそ、地域の中に入って行く、それが1つの引き金となって、地域内から通っている高校生も飛び出して行くということですね。そういう意味では、高校の中で違う価値観がぶつかり合って、そして新しい行動につながるということになっていると思います。

その意味で高校魅力化のプロジェクトというのは、もちろん必ずしもうまくいってないところもいくつかあるようですが、各地で比較的大きな成果を出していると思っております。その点で、浜松市内の高校の魅力化が注目されます。現実には高校魅力化と名乗らなくても、高校生が地域へどれほど飛び出しているのかというのは、場合によって見ていただいてもよろしいかもしれないと思っております。それが先ほどの探究学習や、あるいは地理の必修化ともつながっていれば、それはそれなりに面白い結果かなと思いません。

(山名副市長)

浜松でも天竜にある佐久間高校という県立高校が、そこが本当にこどもたちがいないので、今年度から先ほど小田切委員がおっしゃったようなところを見据えて取り組んでいくような、これから始まることですね。ありがとうございます。

#### 4 閉会

(事務局)

ありがとうございました。

以上で、本日の内容は終了となります。長時間にわたり、白熱したご議論をいただきましてありがとうございました。

本日の議事録につきましては、改めて文書にてご報告をさせていただきます。

次回、新年度 2025 年 6 月から 7 月頃で予定をしております。近づきましたら、日程等の詳細をご連絡差し上げたいと思います。

これもちまして、第 2 回浜松学のあり方検討委員会を閉会いたします。ありがとうございました。

(終了)